

## 普賢寺川をさかのぼる

今の私たちを教え育ててくださったのは、家庭と学校と社会だけではありません。此の国土・山河・自然は言わずもがな、名もなく消え去った数えきれない祖先、先輩の残された営みと、その歴史や伝説も亦、太く、強く、普賢寺教育の根底に、どっかと根を下ろしていることを思いましましょう。そして此の自然を、歴史を、守り育ててくださるのも、今とこれからの皆様でしょう。そうした意味から母校百周年を期に、案外一般から忘れ去られようとする村の誇りや、史跡を、伝説を思い起こしてみたいと思います。

「あの山の上の閑村になぜ高船という名がついているのか。」

「都谷といったところは何の都があったのか。」とか、歴史は知ろうとする心の失せた時、その人の心から滅びているのです。

トンネルが通じ、汽車、電車が走り、道路が縦横に横切って著しい変化に見えても、生駒山脈全体には有史以来それ程著しい天変地異があったとは思われず、川はいつでも高い方から低い方へ流れていました。古い伝説や地名、神社仏閣其の他の歴史も一応疑い、又研究してみる必要もありまして、一部のものずきや学者だけに任しておけない理由も、ここにあります。

藤林鼎さんの書いた「普賢寺村変遷史略」によれば、むかしは筒城縣、筒城里、朱智莊、普賢寺郷などと云って来たところで、近くは打田、高船、天王、水取、上、多々羅、南山、高木、宮ノ口、出垣内の拾ヶ部落の総名であって、今もこれは朱智神社の氏子であります。明治二十二年四月一日町村制実施の際（特に有志会を開き、其の衆議に依り）打田、高船、天王、水取、上、多々羅を合し、之を区称とし、旧郷名に依り、普賢寺村としたと記されている。

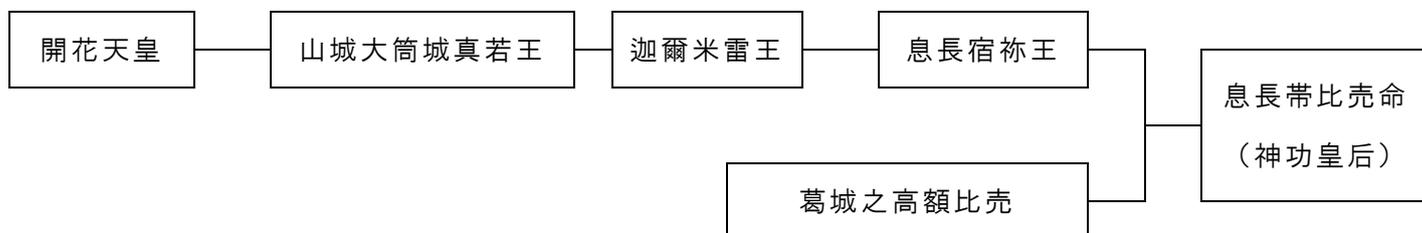
多々羅の都谷は継体天皇が河内国樟葉で御即位後五年目に山城筒城にお遷しになって、ここを七年間都とされた地であることは定説になって居り、そのしるしの碑も全部せまい一ヶ所にあつめられています。これは開発という魔物がおしちぢめたもので、付近一軒や二軒の地は拡大して考えないと錯覚におちいるでしょう。又多々羅に外国蚕発祥の地の三宅さんの標柱がありますが、これは古事記に美しく文学的物語りとして記述されている、仁徳天皇の皇后、磐之姫命（此のお方は履中、反正、允恭の三天皇並に住吉仲津王の御母）が、天皇が皇后のお留居中に八田皇女を宮中にお召し入れになったことに御立腹遊ばして、山代川（今の淀川と木津川）をさかのぼり、葛城高宮の故郷をはるかに望見され、後「筒木の韓人、名は奴理能美（ぬりのみ）が家に入りましき」とあります。この記述の中に多々

羅の地名奴理能美、姓氏録にある多々良公の賜姓等から外国蚕発祥の地がこの地であることが学者の中でも定説になりました。これは村の歴史の大きい眼玉でもあります。(ちょっとお断りして置きますが、継体天皇は人皇二十六代、仁徳天皇は人皇十六代ですから錯覚なさらぬ様)。

都谷の東高地には古代住居跡が発掘調査され、その記録も残されて、同志社では古代建物を復元する計画ときいています。

これより西へ崗つづきに下司古墳群も①②③④⑤号墳とつづき、今では乾漆十一面観音像を祀り、村名の起源となっている息長山普賢教法寺(俗称観音寺又は大御堂)は、昔は筒城大寺と言って地方きっての大きい伽藍がありました。人皇第四十天武天皇の勅願により、義円僧正が開基され、観心山親山寺と号しました。その後聖武天皇の勅願により良弁僧正が伽藍を増築して、前出の息長山普賢教法寺と号し、天平十六年(七四四)丈六の大悲円通尊を安置されたのが、現在の国宝十一面観世音の尊像であり、今でも四時参拝、観光客がたえません。降って興福寺の別院で七堂伽藍が完備して居たことも諸記録、古図に明らかであります。中世には関白藤原基通公の別業の寺で、又御所の内の地名はその館があったところ。なおそのお墓が中島の奥にあたり、この普賢寺から峯つづきに大御堂古墳、普賢寺跡、御所の内遺跡、王居谷①②③④号墳、御家古墳、鏑古墳、丸塚古墳、しお①②号円墳と、水取・天王までに遺跡、古墳群がつづいて、どこをつづいても、どの小字名を追究しても、すでに忘れ亡んだ史跡が散在することが思われます。

延喜式内社は観音寺境内の地祇神社と朱智神社で、朱智神社の祭神は迦爾米雷王(かにめいかづちのみこと)を主神とし、相殿に素戔鳴尊、天照国照彦、火明命をお祭りしています。迦爾米雷王は神功皇后の祖父であり之を系図に示しますと、



で夫々その御名から、神格というか、歴史や地理まで彷彿としてあらわれるではありませんか。名は体をあらわすと云う様な考えは神徳をけがすものでしょうか。たとえば、迦爾米とは衆人を威伏させる大きな出目、雷王は、そのみ声は、かみなりの如く大きく、短く、強く、決定のひびきがあり、それで居て全体としてなつかしいお方と言う様な聯想すると

それこそ目がつぶれるかも知れませんね。又傳うるところによりますと、弘法大師が此の地に来て暫時逗留され、朱智大宝天王を改めて牛頭天皇と称したと云います。普賢寺の山号を息長山と云い、後出の息長館跡、息長の名も注目すべきでありましょうし、神功皇后や仁徳皇后磐の媛の事蹟とも切っても切れない関係あり、又当地の歴史と文化の状態がそうさせたと考えられ、牛頭天王神像が世に稀なるものであり、又、清和天皇貞観十一年に詔に依って、大宝天王を洛東愛宕郡八坂郷感心院に遷し奉り、以来毎年六月、京都の祇園祭に、天王社の櫛をここに移すことが恒例となり、朱智、息長、三国の三家が年番で之を勤め、後にはこれ以外の人がつとめるようになったとは普賢寺旧記に記されているところでもありますし、まだまだ散在する諸記録、古図等の総合研究の余地の多いところ です。

さらに西北方に連なる穂谷、尊延寺、杉、さらに長尾の王仁塚あたりまでが筒城郡であった記録もあります。

更に西南に三国境を過ぎて高船に参りますと、神代にさかのぼって神話の時代にかえり饒連日命に関する伝説があります。

「旧事本紀（くじほんき）」によれば天つ神の子饒連日命は、天の磐船に乗って河内ノ国天ノ川上流、哮ガ峰（たけるがみね）に降臨されたが、次に大和国鳥見の白庭山にうつり、同地の豪族長髓彦の妹（御炊屋媛）を妻として迎え、宇麻志麻治命（物部氏の始祖）をもうけられたとあります。饒連日命が降臨されたのが哮ガ峰磐船村というが、ここ高船ではこの「權ガ峰」に降られ、それより、河内国にうつられたという。それが高船の磐船神社であり、「船石」と称する巨石と船をつなぎとめたという「舟繫松」（今枯死してなし）があったこともまだお互いの記憶に残っています。又「千戈」という峯の名は長髓彦が降参して、千の戈を納めたところとの言いつたえもあります。更に打田に行くと、正しくこれこそ普賢寺川の本流の上流で、村社須賀神社は、朱智神社と共に背後地の大和、河内の牛頭天王と共に深い関係を思わせるものがあり、一度富雄川流域の神社・仏閣を訪ねてみたら、ピンとくるものがあるのではないかと思います。

木津川畔の二四号線から見て、きわだってはつきりみえる一つは、ここ嶽山、朱智の森、甘南備の山頂ですが、ここ嶽山には行者信仰の遺跡があり、打田山城と天王の天王山城、上村の大西館跡や息長館跡、なお水取山城等には南北朝から足利時代にかけての攻防の歴史をのこし、笠置の後醍醐天皇の下に馳せ参じた南山城三十六人衆の麾下や家来等は「南山雲錦拾要」「南山群名録」「南山再興日誌」等で其の事跡はあきらかであるが、水取の藤林春碩氏等が盟主となって、南山城地方の有志を糾合し血盟して、皇居の守衛についた南山郷士の主流は、我が普賢寺郷にあったのであります。明治の新政になって郷士の解散の

時、南山の地にあった「文武習練所」の建物并に器具一切を売却して、其の代金を以て湊川神社神垣に寄付したがその建物が買われて、水取の地蔵講の地に来て役場となり、水取校が出来、さらに、門田に学校が移るについて、役場から先づ門田に、更に学校の北、今の保育園の地に新役場が出来、この建物がなお水取区会所となって御家の地に来て、玄関だけは昔の姿を残しています。このなくなるのは時の問題でしょう。此の外重要古文書、国宝、重要文化財、重要石造美術品、まだ未開拓、未指定のものも沢山此の郷土には残されて居りますし、保存の責任も課せられています。

都市化が開発とするならまだまだ此の山間僻地は未開発と言われましようが、まだ山麗しく、水清くと、小さい声で言ってもよい環境を、もうこれ以上あらさない様にと願うのはひとり我々だけでしょうか。しかも古来此の山の僻地から多くの人物を産み出して居ることはご承知のことです。軍神加藤少将の父加藤鉄造氏が北海道へ屯田兵として出られたのは打田、又徒手空拳都会に出て成功し、母校の教育施設に寄与された岡田寅松、神田喜三、秋元七造氏等は夫々高船、打田、天王の僻地出身であります。蘭学の泰斗藤林普山先生は水取生れ、頼山陽に学んだ詩人であり、医師であり茶人の吉松竜庵は打田に、第一回衆議院議員に当選の伊東熊夫氏と同じく第三回当選の田宮勇氏はともに上区、美学の権威者として幾多の指定と著述を残された京大名誉教授植田壽藏博士は水取生れ、井辻勘次・小川武一、両医博は天王、北村秀弘博士は打田、山下隆男理学博士は上区、これらの方々からも子供心に帰って玉稿を賜りました。ふる里のちからはえらいものです。

画家の生駒翠山・伊東若冲の寓居、水取司遺跡、其他記しもれも沢山ありますが、全部あげるのも目的外です。又巨万の富を積まれた方も多数出て居られますし。お茶でも手工芸でもボタン園でも日本一が出ています。

この母校百周年をスタートに、あとにつづく人に期待いたしまして、馳せ歩きを止めません。

出典：普賢寺校百年誌 落葉杉 p 4～11 (作者未記載)